

幼児の運動を促すもの

—スーパーソフトディスクの場合—

鈴木 隆

(鶴見大学短期大学部)

1. はじめに

近年、幼児の体力低下が問題視されている。周知の通り運動能力テストの結果は、約十年前と比べどの種目においても低下していた。¹⁾その原因は明確に解明されてはいないようであるが、社会の変化に伴う生活様式の変容や子どもの遊び内容の変化などが考え得る原因であろう。しかし一方では、確かに運動能力テストの結果は落ちているが、長年子どもの様子を見て特に最近体力が落ちたということは感じられないとの発言もある。²⁾いずれにしても保育現場としては、現在の各々現場の子どもの姿を大切にしながら、より子どもにとって魅力的で、かつ子どもの成長発達に貢献できる環境を整備していく必要があることは間違いない。そこで今回は、子どもの運動意欲を高め、活発な活動を引き出す可能性を探る意味で、スーパーソフトディスクに着目した。

2. スーパーソフトディスクとは

スーパーソフトディスクとは、一般に市販されているフライングディスク(フリスビーは商品名)に近い形状をしているが、素材が布とウレタンで作られたものである。そもそもフライングディスクは、1940年代初頭に、アメリカのアイビー・リーグの名門校エール大学の学生が、パイ皿を投げて遊んだことがルーツになっている。当時、エール大学の近くに「フリスビー・ベーカリー」というパイの老舗があり、学生間でこの店の「フリスビー・パイ」のパイ焼き用の金属製皿を投げ合って遊んでいたのだ。こうした様子に興味を持ったフレッド・モリソンらによってその後改良され、プラスチック製ディスクが誕生した。1955年にフラフープメーカーのWHAM-O社に発明の権利が譲渡され商品名「FRISBEE」として販売されるようになった。つまり身近な生活用品が遊びに利用されるようになったものである。

スーパーソフトディスクの特性は以下のようにとらえられている。³⁾

- ・軽量でしかも体に当たったときの衝撃はきわめて少ないこと
- ・ディスクであるため、手首で回転を与えさえすれば、

投力の弱い子でも簡単に10m以上飛ばすことができること

- ・強くディスクを投げるためには、ボールを投げるのと同様に体のひねり、足の踏み込み、肩・腰の回転、上半身と下半身の連動した動作が必要になること

これらのことから、小学校の体育の授業では、新しい教材として取り入れられはじめている。ここで挙げられたスーパーソフトディスクの特性は幼児にも適するものではないかと考え、保育への導入の可能性を探ることとした。

3. 研究方法

実際の保育場面にスーパーソフトディスクを置いて、子どもの様子を観察した。スーパーソフトディスクを保育場面に導入するに当たり、保育者には基本的に何も依頼しなかった。ただ「こういうものを置くので、使えるのならどうぞ使ってください。使えないと思ったら使わなくて結構です。」という説明のみ行った。保育の自然な流れの中で、子ども達がこの材料をどのように受け止め、どのように取り入れていくかを見極めたいと考えたからである。対象園は、神奈川県私立幼稚園A幼稚園(園児数237名)、B幼稚園(園児数235名)の2園である。行事等の関係もあり、A幼稚園では10月中旬に、B幼稚園では11月中旬にそれぞれスーパーソフトディスクを園庭の遊具置き場に、子ども達が自由に取り出せるように設置した。なお、観察は初日のみビデオ撮影を行い、その後は経過を観察した。今回は、導入初期の約2ヶ月の子ども達の様子から、スーパーソフトディスク(以下ディスクと略す)の保育への導入の可能性について考察する。

4. 初日の様子

A幼稚園

- ・はじめに年中児数人と担任がディスクに近づいてきた。不思議そうにディスクを手にとっていたが、担任が投げる動作をしながら声をかけるとディスクを投げ始めた。
- ・はじめはうまく回転がかからない様子であったが、

数回投げるうち軽い回転はかかるようになりディスクが飛び始めた。

- ・数メートルあるいは十数メートル投げては拾うことの繰り返し。
- ・数人で向き合って投げ合う。
- ・保育者に当て始め、鬼ごっこのような形になる。
- ・ディスクを縦に投げあげる。
- ・子ども同士で当てあう。(長)
- ・男性保育者との投げ合いが始まり、数名がかなり上手に投げたり取ったりできる。(長)
- ・普段のドッチボールが始まろうとするが、ボールの代わりにディスクを使いディスクドッチボールとなる。(長)

B 幼稚園

- ・はじめ年中児が数名でディスクの置いてある台に近づいてくる。不思議そうな顔で眺めながら、「これ何?」といった会話をしている。ディスクを上からぼんぼんたたいたり並べ直したりしながらなかなか手に取らない。近くにいた観察者に尋ねてきたので、「何に使ってもいいんだよ。投げてもいいね」というような答えをした。それでもしばらくはなかなか手に取らなかったが、数分後に投げる行動が始まった。
- ・投げては拾うことの繰り返し。
- ・ディスクを縦に投げあげる。
- ・保育者との投げ合いが始まる。(長) この投げ合いはしばらくすると、投げ方の工夫へと発展していった。(足の間から投げる、背中側から投げる、サイドスロー、オーバースローなど)ここでは保育者がモデルとしての役割を果たしていた。
- ・保育者にぶつけるが、鬼ごっこのようにはならない。
- ・一人が投げて、数人でそのディスクを追いかける。
- ・遊具の上に登り下にいる保育者に投げてもらいキャッチする。(長)
- ・遊具の上から投げる。(長)
- ・ジャングルジムの上から投げる、落とす。(中)
- ・魚釣りの魚に見立て釣りごっこをする。(中)

5. その後の様子

A 幼稚園

年長児は、しばらくドッチボールをディスクでやっていた。担任保育者によると、当たっても痛くないこと、ボールのように転がっていかないことなどが子どもにとって良いようだとのことであった。そのほかに、ディスク二枚をいっぺんに持って投げる「ダブル投げ」

という投げ方なども出てきた。しかし、3～4週間ほどたつと、ドッチボールはもとのボールを使う形に戻っていった。はじめの頃のように競ってディスクを投げ合う様子は見られなくなったが、しばしば投げ合って遊ぶ姿が見られた。いっぽうで、ままごとの中に取り入れ、お盆代わりに使ったりすることが多く見られるようになってきた。保育者からは、はっきりとは言えないが比較的運動が苦手な子がディスクを持っていることが多いような気がするとのコメントがあった。

B 幼稚園

ドッチボールなどに使う様子は見られなかったが、年長児を中心に様々な投げ方で投げ合ったり、わざと狭い通路状の所で投げたりする姿が見られた。また、初日に見られたような遊具との組み合わせで投げることを楽しむ姿も継続してみられた。

6. 考察とまとめ

どんな遊具でも導入初期はたいてい、目新しさもあって子ども達が飛びつくものである。スーパーソフトディスクも例外でなく、導入初期は奪い合う様子があった。A幼稚園で行われたディスクドッチボールは、小学校などでもルールを工夫して行われている。しかし数週間でもとのボールに戻ったのは、子どもにとってはやはりボールを使つてのドッチボールの方が魅力的だったからであろう。特に自由遊びの際にドッチボールに入ってくる子どもにとってはそうなのだといえる。まだはっきりとは言えないが、A幼稚園の保育者のコメントもあわせて考えると、スーパーソフトディスクは、比較的運動が苦手な子にとって活動を促す可能性があると見えそうである。

一方B幼稚園では、年長児を中心に投げることを楽しむ姿が継続している。導入初期に保育者がモデルとなって、様々な投げ方を提示したこともその一因となっているのであろう。

今後さらに経過を観察し、スーパーソフトディスクの保育における有用性を検討していきたい。

参考文献

- 1) 近藤充夫他「最近の幼児の運動能力」体育の科学第48巻第10号, 1998
- 2) 近藤充夫他「自主シンポジウム18 低下する幼児の運動能力と保育の課題」日本保育学会第52回大会研究論文集, 1999
- 3) 小田切浩二郎「フライングディスクを使ったゲーム」学校体育8月号, 1999
- 4) 日本フライング・ディスク協会編「フライング・ディスクのすすめ」ベースボール・マガジン社, 1988